



二松学会松谷会 若手連支部便り
 発行日 二〇二二年 十月 七日
 編集者 宮本 義孝 第一〇四号

瀬川孝三君逝く

九月二四日朝、新聞に目を通っていて、おくやみ欄に瀬川孝三君の名前があるのを見つけてきました。思いも寄らぬことだったので驚きました。俄かには信じられず、何度も確認したりしましたが、どうやら間違いはなさそうです。

それで、取り敢えず奥様宛、お悔みの手紙を出すことにしました。

「瀬川孝三君のご逝去のこと、九月二四日付の新聞で知りました。心よりお悔み申し上げます。

私は今、松谷会の副支部長をしていますが、瀬川君とは大学は同期でした。クラスは違っていたものの、金町の大学寮は同じ、所謂、同じ釜の飯を食った生活をしました。また松谷朴教授のセミナーも一緒で、三、四年生時の二年間、机を

「お知らせすること遅くおぼやかり 申し訳ございません

瀬川は長く日赤に通院しておりました。通院は大変でしょうから花巻の たきのクリニックを紹介し、日赤には二年に一度くらい来て精密検査を受けはいいでしょう。という病院の話で、八月末から たきのクリニックに通っていました。ところが最近になって急に体調が悪化し、九月八日に もとだて病院に入院し、九月十七日はコロナウイルスにも感染しているということで、私も顔を見ることが出来なくなりました。二十二日午後八時二十五分、急性心不全で亡くなりました。ただお骨との対面でした。その時は、本当に孝三さんだろうかとおぼやかりましたが、頭の骨で入ると納得しました。私自身、初七日を過ぎても、瀬川の死が信じられず、ただ茫然と一日一日を過ごしてまいります。

皆様には、本当に失礼ばかりしております。どうぞお許しくたさい。」

瀬川君は、支部総会、懇親会には七年ほど前から姿を見せなくなりました。夕分、その頃から体調が悪くなり、なかつたのだらうと思います。けれど、出欠通知の近況報告には、そ

並んで勉強もしました。

大学卒業後、私は東京の高校に勤めましたが、その後、縁あって盛岡の高校に務めることになり、同じ年に校長になり、国語科の教師として、高教研、校長会、松谷会の仕事で行動を同じくすることが多くありました。

十年ほど前の支部総会の時、俺が死んでも、宮本が先でも、お悔みの遣り取りは、無しにしようぜ。お返しほど面倒は嫌だから、俺らのことは、お互い、想いの内だけで十分だ、と言っていました。けれど、亡くなくなってからは、瀬川君のことは、他の会員や本部にも知らせねばならず、また人に対しては面倒見の良い所もあり、生前、お世話をされた方も多々あるかと思えます。私の所にも問い合わせがあるかも知れません。お取り込み中、恐縮ではありますが、亡くなられた日時と場所、それに何に因ってか、などお知らせ下さいは幸いです。

瀬川君は体つきもガッシリしていて、とても病魔に侵されるようには見えませんでした。それだけに驚きでもあり、残念でもあります。ご冥福をお祈りするばかりです。合掌」
 それから一週間ほどして、奥様から次のような返信がありました。瀬川君の最期の様子は、これで少しは知れるかと思えます。転載します。

このことは書かれておりません。加えて彼はガッシリした体格で、一見、病気があるようには見えません。迂闊でした。

我々の世代には、自分のことについて、あまり人に心配かけたくない。衰えた姿を見せたくない、と云う気持があります。けれど、コロナウイルスの罹患で、ただ独り病いに向き合わなければならなかった瀬川君の孤独を思いつ時、やはり彼の淋しさに思い至らなかつた自分に悔いは残ります。残念です。

瀬川君からの近況報告は、次のようなものでした。
 〇平成二七年、毎回の土気つかい、御書房までです。出席します。皆様との再会を心待ちにしています。

〇平成二九年、へこの年から出席なくなると、七喜の年を迎え、心静かに生活しています。世間の喧騒に巻き込まれぬよう自制している毎日です。

〇平成三十年、無病息災とは言えないまでも、それなりに気を遣いながら生活しています。地区の民生委員を御せつかつています。

〇令和二年、教員退職後、これといった職務に つくこともなく、思いのままの生活を送っています。自由奔放な生活は気楽なものです。皆様の幸せをお祈りいたします。